

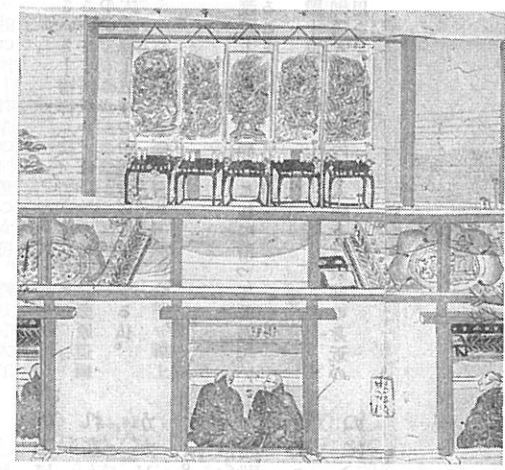
寛弘五年(一〇〇八)七月

* けはひの(岩) 土御門殿左大臣藤原道長の居宅で、本来は道長の妻倫子の所領。不斷の御読経安産祈願のために日夜不斷に行っている御読経。星夜十二時を十二人の僧が輪番で受持ち、大般若・最勝王・法華等の經番で読む。開きまがはさる遣水の音が、風の音、読経の声に相和してそれがどの音と区別のつかぬように聞こえることをいう。
○御前—一条天皇の中宮彰子。道長の長女。

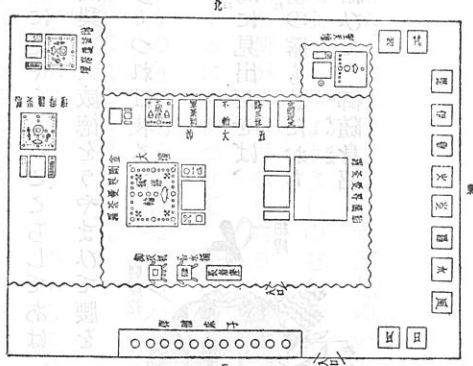
○うつし心— 理知・理性が正常に働いている精神状態。
○女官— 燈籠・洒掃の事などを掌る身分の低い女官。
○蔵人— 女蔵人。雑用を掌る。
○夜・後夜— 晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜(六時)の五つ。午前四時頃。
○五壇の御修法— 五つの壇に仏を請じてする祈禱。中央に不動明王、東に降三世明王、西に大威徳明王、南に軍荼利夜叉明王、北に金剛夜叉明王をまつる時刻。
○時— 祈禱すべき定め時刻。
○はじめつ— 始め(岩)
* うちあげ— ときあげ(岩)
○観音院の僧正— 勝算。僧正は僧官の最高位。観音院は京都府の北岩倉山にあり、天台座主餘慶の創立。

秋のけはひのたつままに、土御門殿の有様いはむ方なくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの叢、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空もえんなるに、もてはやされて、不斷の御読経の声々、あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水のおとなむ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも、近うさぶらふ人々はかなき物語するを聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御有様などの、いとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづね参るべかりけれど、うつし心をばひきたがへ、たとしへなくよろづ忘るるにも、かつはあやしき。

まだ夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まゐりなばや。女官はいまださぶらはじ。蔵人まゐれ。」などいひしろふほどに、後夜の鐘うちおどろかし、五壇の御修法、時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろ



五壇の御修法 (年中行事絵巻)



同上平面図



大威徳明王 (高知竹林寺蔵)



智拳印



三鈷印



八葉印

— 真言印の一部 —